

3年度グランプリ 和歌山県立和歌山商業高校



令和3年度(2021年度)

1.17 防災未来賞

ほろい甲子園

記録誌

学びではぐくむ
しなやかな力

- 主 催● 兵庫県、(株)毎日新聞社、(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
(阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター)
- 後 援● 内閣府、総務省消防庁、文部科学省、国土交通省、兵庫県教育委員会、
神戸市、神戸市教育委員会、関西広域連合、
ひょうご安全の日推進県民会議
- 協 賛● 独立行政法人都市再生機構
- 事務局● 特定非営利活動法人さくらネット



兵庫県知事
齋藤 元彦

自然の脅威やいのちの尊さ、ともに生きることの大切さなどを考える「防災教育」を推進し、安全安心な社会の実現をめざす子どもたちの活動を顕彰する1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」。

コロナ禍のなか、学校や地域での活動には難しい面もあったと思いますが、全国から110もの優れた取組の応募があったことは嬉しい驚きでした。

オンラインを活用し、被災地の方々から実際の被災体験について話を聞いた皆さん。過去の災害を踏まえた啓発動画や、防災豆知識をまとめた冊子などを作成した皆さん。防災・減災をテーマとするゲームを取り入れ、楽しみながら学びを深めた皆さん。

どの取組も、皆さんが防災・減災に真剣に取り組まれていることが、ひしひしと伝わってくるものばかりでした。本当に頼もしい限りです。

災害はいつ、どのように発生するか、予測することが困難です。だからこそ、過去の災害の経験や教訓を「伝え」、これからは「活かし」、南海トラフ地震など次なる災害に「備える」ことが大切です。

これからも、若い皆さんが率先して防災・減災活動に取り組み、安全で安心な社会づくりを力強くリードしていかれることを期待しています。

そして、ぼうさい甲子園を通じて、家庭や地域など、あらゆる生活の場面で、一人ひとりが防災・減災について考え、行動する「災害文化」がさらに広がっていくことを願っています。



毎日新聞大阪本社編集局長
鯨岡 秀紀

オンラインという形になりましたが、全国から大勢の方々に表彰式にご出席いただき、誠にありがとうございます。また、新型コロナウイルス感染症の流行がいまだに続く中、急遽オンラインの準備を整え、表彰式の開催にご尽力いただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

今年も全国各地のみなさんから多数の応募をいただきました。私も選考に参加させていただきましたが、それぞれ工夫と熱意が感じられるものばかりで甲乙付けがたく、順位を決めるのに大変苦労しました。特に、上位の方々はほとんど差がないと感じました。委員が集まった選考委員会でも、全員が同じ順位を付けたのはごくわずかで、どの応募もレベルが高かったことを示していると思います。

この地を襲った阪神大震災から既に四半世紀以上が過ぎました。当時、私は西宮市に居住しており、自宅で強烈な揺れを体験しました。地鳴りのようなもので目覚め、すぐに激しい揺れ。これはダメだと覚悟もしました。幸い自宅は倒壊せず、たまたまですが寝ていた部屋にたんす等の家具がなかったことも幸いし、けがもありませんでした。別の部屋にいたら、全く違う結果になっていたと思います。

その後は被災現場や避難所の取材にあたりましたが、当時の私と同じく、夫婦と子どもの3人家族の方が、私たち家族と同じ川の字で寝ていて亡くなられた現場にも遭遇するなど、非常につらい取材でした。それ以来、被害を防ぐ、少なくとも軽減するには、事前の備えしかないことを胸に刻み、私も微力ながら災害報道に関わってきました。

阪神大震災をきっかけに日本の防災対策は大きく変わりましたが、みなさんの応募資料を拝見しながら、次の災害に備える取り組みが以前では考えられないほど広がっていることを実感し、力強く感じました。

ただ、災害は想定通りに起きるとは限りません。しかも、さまざまな要素の中の最も弱い部分、手薄だった部分を突かれ、「想定外」という形で被害が拡大します。季節や発生時刻、その時の天候など、さまざまな要素が絡んで、被害の状況や必要な対応も変わってきます。

みなさんの目的は、いざという時、家族や友だち、地域の人たちを救うことだと思います。順位を付けて表彰していますが、どの取り組みも不可欠の取り組みです。今後の災害で、みなさんの取り組みが少しでも被害の軽減や被災者の支援につながるよう、さらなる取り組みを期待して、ごあいさつといたします。



公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長
(阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長)

河田 恵昭

1. 17防災未来賞「ぼうさい甲子園」を開催するにあたりまして、全国からたくさんの方にご参加いただきまして、ありがとうございます。

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症に対する取り組みを対象活動に加えた今年度のぼうさい甲子園は、北海道から大分県までの31都道府県から、110校・団体の応募がありました。この大変な状況の中で、コロナ前の一昨年と同程度の応募数があったということは、17回を重ねる本事業の趣旨が幅広く浸透してきているのではないかと考えています。

ところで、年明け早々小笠原諸島で震度5強の地震が発生しました。令和3年は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の波が何度も繰り返される中で、全国各地で比較的大きな地震が何度も起きており、学校教育の現場では、防災教育の重要性を再認識されたのではないのでしょうか。このように、社会や環境が変わりゆく中で、その教育活動を進めるに当たっては、児童・生徒・学生諸君とその保護者のもとより、先生、学校関係者、地域の皆様もご苦労されていることと存じます。

そうした中、昨年は行えなかった、その苦労を称える表彰式を、このたび、兵庫県で行えることをうれしく思っています。一方、例年、表彰式後に実施しておりました発表会につきましては、今年度も、新型コロナウイルス感染症に係る懸念を考慮し、残念ながら、実施しないこととしました。

みなさんのさまざまな工夫や知恵を多くの方々の前で直接ご披露いただく機会がなくなったことは、大変申し訳ないと感じていますので、発表会でご披露いただく内容を動画にさせていただいて、後日、ぼうさい甲子園の特設サイトで公開させていただくこととしております。是非、皆さんには、特設サイトの方で、他校の工夫や知恵をご覧いただき、今後の防災教育に向けて、参考にさせていただけたらと思います。

今後も社会情勢は常に変化していくことになると考えていますが、防災教育の重要性は変わりません。その時代、時代に合わせた取り組み方があると思います。そして、このぼうさい甲子園も同じように少しずつ時代に合わせて変化をしながら、さらに20年、30年と継続していきたいと考えています。今日の表彰式や特設サイトを通じて、皆さま方に、この「ぼうさい甲子園」という活動を十分、ご理解いただきまして、この活動がさらに広がって欲しいという私の願いをお伝えしまして、私の開会の挨拶とさせていただきます。

講 評

審査にあたりましては、「地域性」「独創性」「自主性」「継続性」といった4つの観点を選考基準に、選考委員会で審査し、決定しました。応募があった防災教育や防災活動の取り組みはどれも素晴らしいものばかりでしたが、これらの中で特に優れた64団体を表彰することとなりました。

「グランプリ」には、「高校生の部」の「和歌山県立和歌山商業高等学校」です。この学校では、商業専門科目「電子商取引」の学習の中で、4年前から継続して「南海トラフ地震に対する防災・減災」をテーマに取り組まれています。毎年の成果をウェブページやYouTubeを活用して翌年度に共有しながら、着実に防災教育を進め、このぼうさい甲子園には、初応募で今回は見事グランプリに輝きました。

ぼうさい大賞「小学生の部」は、徳島県「阿南市立津乃峰小学校」です。平成26年度から活動され、既に様々な表彰を受け、このぼうさい甲子園でも大賞を始め、何度も受賞されている学校です。この大変な状況の中でも、オンラインを活用するなど模索しながら質の高い活動を継続されており、今年度もぼうさい大賞に選ばれました。

ぼうさい大賞「中学生の部」は、宮城県「気仙沼市立鹿折中学校」です。学校防災を地域防災の一つとして、学校と地域が連携して防災学習に取り組み、学校と地域が協働で新型コロナウイルス対策の避難所初期設営訓練を行うなど、昨年度のしなやかwithコロナ賞受賞を引き続き、3度目の応募で、ぼうさい大賞に選ばれました。

ぼうさい大賞「大学生の部」は、「愛媛大学 防災リーダークラブ」です。この団体は、短期集中講義「環境防災学」で防災士資格を取得した大学生の団体で、NPO団体として登録し、平成27年の結成以来、松山市と連携して、防災活動に取り組まれています。このぼうさい甲子園には、初めての応募で「ぼうさい大賞」受賞となりました。

ぼうさい大賞「特別支援学校・団体の部」は、「埼玉県立日高特別支援学校」です。GIGAスクール構想で整備されたiPadを活用し、作成した防災学習の動画の視聴や、校内に設置したQRコードを読み込んでミッションに取り組む「かわせみ防災クエスト」の作成などこれまでの取り組みを改善し、一昨年に続き、二度目の「ぼうさい大賞」の受賞となりました。

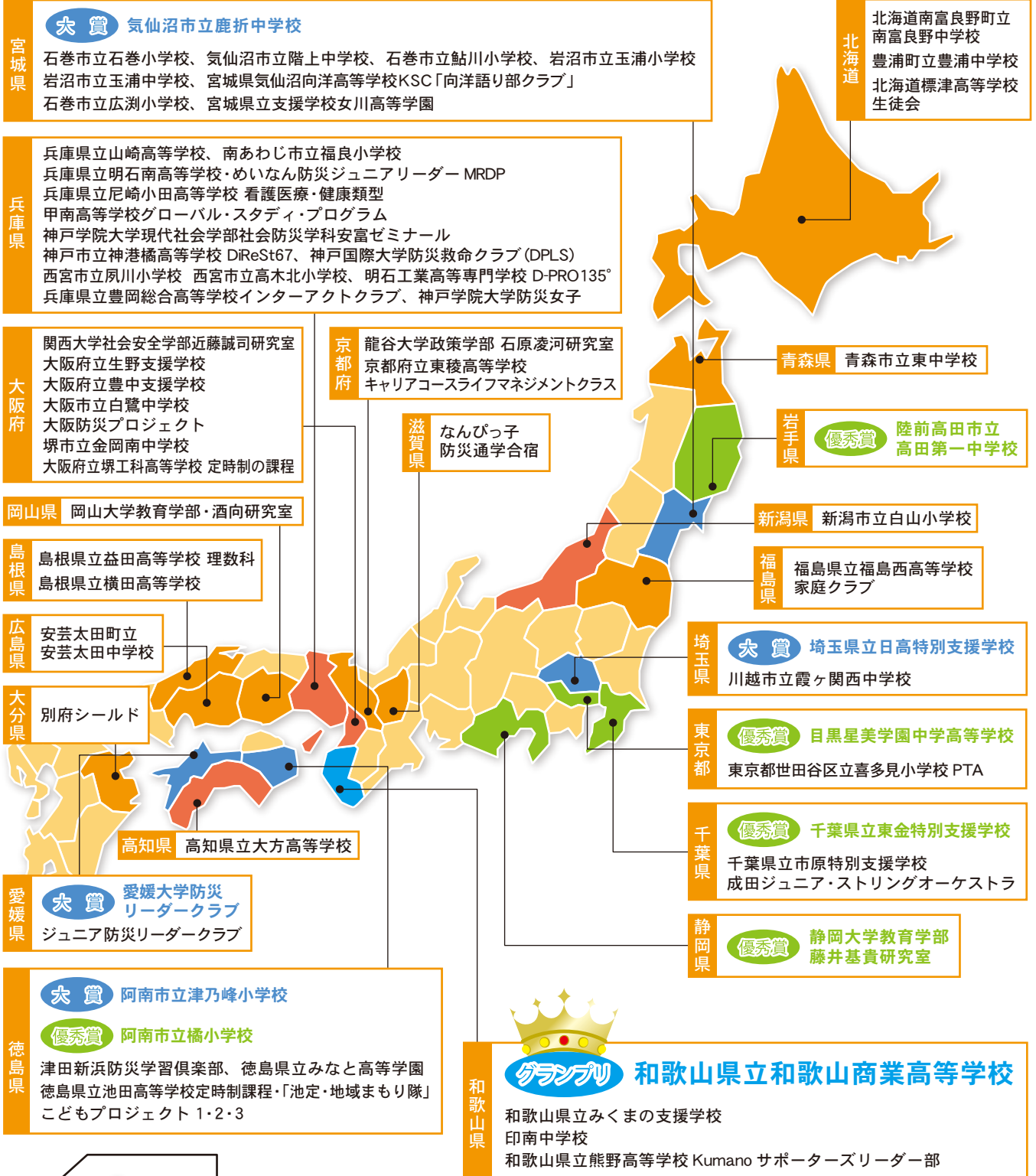
このほか、厳しい環境の中で創意工夫をされた各校に、優秀賞や奨励賞を始め、URレジリエンス賞、はばタン賞、だいいじょうぶ賞、フロンティア賞、継続こそ力賞、そして、しなやかwithコロナ賞の各特別賞を授与させていただきました。

令和3年度 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」

受賞校・団体のご紹介

今年度は、64校・団体が受賞いたしました。

来年度も、更にレベルアップした取り組みのご応募、お待ちしております。



賞	部 門	都道府県	学校・団体名	ページ
グランプリ	高校生部門	和歌山県	和歌山県立和歌山商業高等学校	P.6
ぼうさい大賞	小学生部門	徳島県	阿南市立津乃峰小学校	P.6
	中学生部門	宮城県	気仙沼市立鹿折中学校	P.7
	大学生部門	愛媛県	愛媛大学防災リーダークラブ	P.8
	特別支援学校・団体部門	埼玉県	埼玉県立日高特別支援学校	P.8
	特別支援学校・団体部門	埼玉県	埼玉県立日高特別支援学校	P.8
優秀賞	小学生部門	徳島県	阿南市立橋小学校	P.8
	中学生部門	岩手県	陸前高田市立高田第一中学校	P.9
	高校生部門	東京都	目黒星美学園中学高等学校	P.9
	大学生部門	静岡県	静岡大学教育学部藤井基貴研究室	P.10
	特別支援学校・団体部門	千葉県	千葉県立東金特別支援学校	P.10
奨励賞	小学生部門	宮城県	石巻市立石巻小学校	P.11
	小学生部門	新潟県	新潟市立白山小学校	
	中学生部門	宮城県	気仙沼市立階上中学校	
	中学生部門	徳島県	津田新浜防災学習倶楽部	
	高校生部門	兵庫県	兵庫県立山崎高等学校	
	高校生部門	高知県	高知県立大方高等学校	P.12
	大学生部門	大阪府	関西大学社会安全学部近藤誠司研究室	
	特別支援学校・団体部門	千葉県	千葉県立市原特別支援学校	
	特別支援学校・団体部門	和歌山県	和歌山県立みくまの支援学校	

令和3年度 特別賞	説 明	学校・団体名
URLゼリエンス賞	被害を減らすと同時に、復旧までの時間を短くすることにより、社会に及ぼす影響を減らす“レジリエンス(縮災)”という考え方に繋がる取り組みに贈られます	南あわじ市立福良小学校(兵庫県)、ジュニア防災リーダークラブ(愛媛県)、印南中学校(和歌山県)、兵庫県立明石南高等学校・めいなん防災ジュニアリーダー MRDP、兵庫県立尼崎小田高等学校看護医療・健康類型、龍谷大学政策学部石原凌河研究室(京都府)、大阪府立生野支援学校、大阪府立豊中支援学校、徳島県立みなと高等学園
はばタン賞	阪神・淡路大震災以降に被災した地域にエールを送るため、これら地域を対象に被災の経験と教訓から生まれた優れた活動に贈られます	石巻市立鮎川小学校(宮城県)、岩沼市立玉浦小学校(宮城県)、北海道南富良野町立南富良野中学校、岩沼市立玉浦中学校(宮城県)、宮城県気仙沼向洋高等学校KSC「向洋語り部クラブ」、福島県立福島西高等学校家庭クラブ、甲南高等学校グローバル・スタディ・プログラム(兵庫県)、神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミナール(兵庫県)、成田ジュニア・ストリングオーケストラ(千葉県)
だいじょうぶ賞	安心・安全なまちづくりを目指す「だいじょうぶ」キャンペーン実行委員会にちなんだ賞 防犯や街の身近な安全、安心・安全なまちづくりを目指す優れた活動に贈られます	大阪市立白鷺中学校、和歌山県立熊野高等学校 Kumano サポーターズリーダー部、徳島県立池田高等学校定時制課程・「池定・地域まもり隊」
フロンティア賞	防災教育活動の広がりを促進するための賞 過去に受賞がなかった地域・分野での先導的な取組または初応募の優れた取り組みに贈られる賞です	豊浦町立豊浦中学校(北海道)、安芸太田町立安芸太田中学校(広島県)、北海道標津高等学校 生徒会、島根県立益田高等学校理数科、島根県立横田高校、大阪防災プロジェクト、別府シールド(大分県)
継続こそ力賞	過去数年に渡り継続的に実施された優れた取り組みに贈られる賞です	石巻市立広瀬小学校(宮城県)、神戸市立神港橋高等学校 DiReSt67(兵庫県)、神戸国際大学防災救命クラブ(DPLS)(兵庫県)、こどもプロジェクト1・2・3(徳島県)
しなやかwithコロナ賞	新型コロナウイルス感染症対策や、防災活動の中での感染症対策など、迅速性や柔軟性のある取組みに贈られる賞です	なんびっ子防災通学宿舎(滋賀県)、西宮市立夙川小学校 西宮市立高木北小学校(兵庫県)、青森市立東中学校、川越市立霞ヶ関西中学校(埼玉県)、堺市立金岡南中学校(大阪府)、京都府立東稜高等学校キャリアコースライフマネジメントクラス、大阪府立堺工科高等学校 定時制の課程、明石工業高等専門学校 D-PRO135(兵庫県)、兵庫県立豊岡総合高等学校インターアクトクラブ、神戸学院大学防災女子(兵庫県)、岡山大学教育学部・酒向研究室、宮城県立支援学校女川高等学園、東京都世田谷区立喜多見小学校 PTA



令和3年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」 グランプリ

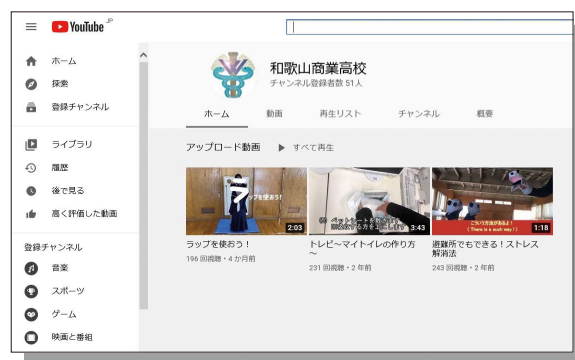
和歌山県

和歌山県立和歌山商業高等学校

【活動の成果、手応え】

商業専門科目「電子商取引」の学習の中で、4年前から継続して「南海トラフ地震に対する防災・減災」をテーマに取り組を続けている。近隣校や施設等と連携し、被災時により困難が予想される災害弱者に焦点をあて、課題解決に向け次のプロジェクト別に行っている。(1) 防災植物のを見つけ方と調理法紹介動画制作(2) 被災時に用いるコミュニケーションツールの開発(3) 防災設備の活用法紹介動画制作である。事前学習で防災士や日本防災植物協会の協力を得て対面・オンラインによる講演を受けた。避難所運営ゲーム

HUGや防災教育教材EVAG等を活用し、災害時の避難から避難所生活まで見越したシミュレーションを行い具体的な課題について考察した。「成果」は防災減災に対する「自分事化」である。継続して多様な地域の人々に関わることで、主体性・積極性や専門科目の学習意欲の涵養、地域の人々との相互理解が深まりつつある。



令和3年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」 小学生部門 ぼうさい大賞

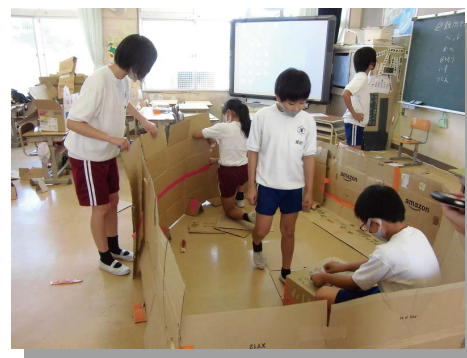
徳島県

阿南市立津乃峰小学校

【活動の成果、手応え】

「持続可能で、安定した日常としての防災教育」「自分の命は自分で守る、みんなの命はみんなで守る」をテーマに、本校では防災教育を実施している。日常の教育活動全体に防災教育を組み込むことで、児童にとって防災は特別なものではなく、非常事態にも冷静に対処できる姿勢が育ってきている。

ところがここ近年、新型コロナウイルス感染症の影響で、避難訓練をはじめとした防災活動を縮小せざるを得なくなった。コロナ禍の中でどのように防災意識を高めていくのか、創意工夫が問われている。そこで、集会や講演はオンライン形式で行ってきた。感染症対策ができるだけでなく、いままで会うことの難しかった遠方の方や専門家との交流も可能となり、交流の幅が広がった。感染症対策を講じながらの防災教育は、私たちが命の尊さを再確認するきっかけとなった。ピンチをチャンスに変え、津乃峰小学校は今後も持続可能な防災教育を推進していく。



令和3年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」
中学生部門 ぼうさい大賞

宮城県

気仙沼市立鹿折中学校

【活動の成果、手応え】

学校防災が地域防災の一つとして、学校と地域が連携して防災学習に取り組んでいく実践例である。学校と地域が協働で新型コロナウイルス対策の避難所初期設営訓練を行ったり、震災を経験した地域の方から中学生が聞き取り調査を行って震災伝承を行ったりしたものである。地域と連携して防災学習に取り組むことは、生徒の防災意識だけでなく地域の防災意識の高揚にもつながるものである。また震災伝承学習は、震災の事実を知り、その教訓を伝えることで、伝えた人だけでなく伝えられた人にとっても防災意識を高めるための有効な手段である。



令和3年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」
大学生部門 ぼうさい大賞

愛媛県

愛媛大学 防災リーダークラブ

【活動の成果、手応え】

愛媛大学防災リーダークラブは、短期集中講義「環境防災学」で防災士資格を取得した大学生団体で、松山市のNPO団体として登録している。平成27年の結成以来、松山市と連携して、地域の地区防災計画づくりなどの自主防災活動や、小学校、中学校での防災教育などの活動を続けている。また、地元商工会議所とも協働し、企業との共同研究や防災指導を通じて、企業防災リーダーを育成するなど、「産官学民」での連携を保ちながら全ての世代に防災リーダーを育成する取組の中心的役割を担うことで、様々な職域や世代に防災リーダーの育成が広がっている。最近では、コロナ禍の影響が続く中、知恵と工夫で防災教育を継続できるよう、防災教育動画の作成に

取り組み、YouTubeチャンネルに掲載するほか、今年7月には、オンライン防災教育フォーラムを大学や市と開催し、パネルディスカッションや防災教育劇で、児童生徒や地域住民に率先避難の重要性を広めた。



令和3年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」
特別支援学校・団体部門 ぼうさい大賞

埼玉県

埼玉県立日高特別支援学校

【活動の成果、手応え】

防災委員会では、対外的な活動としてはるかのひまわりの種を地域に寄贈したり、阪神淡路大震災の1.17のつどいに紙灯籠を送ったりする活動をした。校内では携帯トイレを作成した際に高分子ポリマーを活用したおもちゃや保冷剤作りを行い、災害時に必要な備えと携帯トイレの仕組みを学習した。夏休みに行われた日高市のボランティア体験プログラムで同じ内容を実施し、参加した中学生が本校同様に災害時の備えについて学ぶことができた。

また、GIGAスクール構想で整備されたiPadを活用し、作成した防災学習の動画の視聴や、校内に設置したQRコードを読み込んでミッションに取り組む「かわせみ防災クエスト」では、生活年齢や発達段階などの違いを考慮し、それぞれのペースや少人数でも同じ学習ができるように工夫した。新型コロナウイルス感染症対策のため三密を避け、実態に合った内容で防災学習を継続することができた。



令和3年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」

優 秀 賞

徳島県

阿南市立橘小学校

【活動の成果、手応え】

子どもたちの発見・疑問から深まった防災学習である。町探検での地域の津波碑発見から、地域の過去の地震津波被害を知り「みんなで助かる町に」が子どもたちの合い言葉になった。高台にある本校は避難所となるが、陸の孤島にならないように「命を繋ぐ道」の探索や雨天時の防災施設を使った活動等でより実践的な学びができた。東日本大震災から10年目、宮城県とオンラインでの被災者からの話で、身近な人の大切さや日常の延長線上に災害があることを知り、平時の準備の充実を心がけた。そのため、避難所となる学校のトイレに、災害時の使い方を常設したり発達段階に応じた避難所運営の学習をしたりする等で、子どもたちの防災意識も高まった。また、町探検で土砂災害警戒区域である地域であることを改めて知り、土砂災害の学習や避難訓練も実施。津波被害だけでなく土砂災害も学ぶこともできた。様々な防災学習で地元自主防災会との連携も密になってきている。



優 秀 賞

岩手県

陸前高田市立高田第一中学校

【活動の成果、手応え】

3年間の防災学習のまとめとしてテーマを「CHANGE～わが町の新たな光を求めて～」と設定し、震災の教訓の継承とダイバーシティの視点から防災について考え、住み続けられる町作りについて提案した。震災の教訓やわが町の宝について継承する担い手として、生徒が主体的に活動し発信できたこと。年齢・障害の有無・文化の違いを超えて安心・安全に生活するためには、相互理解、日頃のコミュニケーションの大切さに気付いたこと。また、命を守る為には自助・共助のあり方について地域全体で考えることが大切であることに気付くなど、活動や視点に広がりが見られた事などが成果である。本校独自の防災学習ノート「まもるくんノート」を活用し、3年間の復興防災学習を進めてきたが、3年間生徒がこの町をより大切に思い、自分達に出来ることで町の力になろうと思い活動できたことや、いつも楽しみながら80人全員で活動できたことが何よりもの成果である。



東京都

目黒星美学園中学高等学校

【活動の成果、手応え】

「コロナ禍でも自分たちにできることをしよう！」という思いを持ち、様々なプロジェクトが立ち上がった。例えば、生徒会が中心となって全校で展開している「はざーどうする？」プロジェクトでは、様々なシチュエーションを想定して、全校生徒に地震発生時取るべき避難行動のアイデアを考えてもらい、「避難行動アイデア集」の作成を目指している。またP・F・Fプロジェクト（Prepare for the future から命名）では、区役所からの依頼で、地域住民のための防災動画を作成した。メンバーで話し合って内容を考え、住民の方たちに防災に前向きに取り組んでもらえるように工夫した。動画では自宅を安全にする「改宅力」、日常備蓄をすすめる「回卓力」、災害時に正しく情報を理解して選択する「解釈力」の3つを身につけたい「防災かいたく力」として提案した。出来上がった動画は世田谷区の公式YouTubeにアップされている。



優秀賞

静岡県

静岡大学教育学部 藤井基貴研究室

【活動の成果、手応え】

静岡大学教育学部藤井基貴研究室は「考える防災」、「脅さない防災」、「伝える防災」をテーマとして、これまでに開発した授業案、防災紙芝居などの改善・普及を図るとともに、オンデマンドによる動画教材の開発・配信も行っている。また、教材を英語及びスペイン語に翻訳し、海外の教員向けの教材・研修用の動画も制作した。その成果としてJICA等の支援により、エクアドルにスペイン語版の防災紙芝居を提供し、現地の危機管理庁によって主要7都市に提供された。また、「ぼうさい甲子園」で御縁のあった他大学学生と共同オンラインイベントを行うなど、コロナ禍にあっても防災を通じた連携を重ねることができた。あわせて、高校生による防災講座の支援にも力をいれている。静岡県内の五つの高校と連携し、学生が指導した500名の高校生が地域の保育園や幼稚園で防災講座を実施した。大学生から高校生へと防災の輪が広がっていることを実感している。



千葉県

千葉県立東金特別支援学校

【活動の成果、手応え】

平成23年の防災チャレンジプランをきっかけとした防災活動を継続していくために、地域と共に活動を行い、地域の防災力を高めることを目的に活動を行っている。また、東日本大震災で現地へボランティア活動に行った際に防災を「あたりまえ」にすることの大切さを学び、「あたりまえ防災隊」を結成した。現在も校内外で児童生徒主体の防災活動に取り組んでいる。

今年度は感染症対策から、目的の中心である地域と連携して防災力を高めるための関わりの代わりに、毎月防災隊通信を発行したり、防災隊が中心となってコロナ禍での「あたりまえ防災動画」を撮影し、HPにアップしたりして、地域を含め広く防災の意識を高めることを周知できた。また、防災隊通信を各家庭への配布や「あたりまえ防災動画」を全校集会での披露、防災隊による校内の安全点検実施を行うことにより、校内の児童生徒の防災への意識についても、より「あたりまえ」になってきている。



奨励賞

宮城県

石巻市立石巻小学校

東日本大震災から10年が経過し、震災後に誕生した児童が大半を占めるようになってきた。震災の記憶が風化しないよう、地域の災害特性も含め「知る」ことを防災教育で行う必要性を感じている。また、震災の教訓から、普段から学校と地域が連携することの大切さ、つまり自助だけでなく共助・公助の取り組みも重要であることを痛感した。そのため、学校と地域が協力し合える体制作りを行うことが活動の目的となった。月に一度行われる「安全の時間」と安全通信の発行の継続に加え、毎年設定される「みんなで安全の日」では、学区内にある外部機関や地域住民、保護者も一緒に防災について考え学び、地域全体の防災意識の向上につながっている。避難訓練での外部機関や地域住民の参観や、防災教育で学区内の防災関連施設との連携を計画的に行い、その取組を積極的に発信していくことで、持続可能な安全教育を今後も進めていきたい。

新潟県

新潟市立白山小学校

新潟地震で大きな被害を受けた地域にある本校は、5学年で「防災」を探究課題に総合学習を行っている。今年度は、子どもの自主性や社会参画する力を育むために、①防災まち歩き②ミニ防災会議③安心マップ作成④商店街減災プロジェクト⑤白山幸せプロジェクトの場を設定した。校区のコミュニティ協議会や商店街の方々と、年間通した70時間の大単元で展開している。協力者として、新潟市危機管理防災局や新潟市歴史博物館、まちづくりデザイナーの方々も加わっている。子どもは地域の方々と一緒に学習することで、新潟地震の体験談から具体的に避難行動や対策を考えることができた。また、防災会議のように大人と子どもみんなで話し合うことが減災につながると考え、もっと多くの人たちに減災について考えるきっかけをつくりたいという思いを抱いた。そこで、現在は週末に来訪者が1000人を超える上古町商店街を舞台に、減災プロジェクトを展開している。

宮城県

気仙沼市立階上中学校

「概要」

「私たちは未来の防災戦士」将来どこにいても地域の防災リーダーとして活躍できる人材の育成と、災害に強い地域づくりを目指す。

「成果」

中学生も地域住民の一員として、防災訓練の一部を担い、周囲の大人から褒められたり認められたりすることを通して、自己有用感を高め、主体的に取り組む態度が身に付いた。また、探究的学習を通して、防災における課題を自分事として捉え、解決しようとする意欲を高めた。さらには、地域全体の防災意識を向上させるために、地域住民のあるべき姿について自分なりの意見を持ち、自分の思いや考えを進んで表現し、行動する力も育成された。

徳島県

津田新浜防災学習倶楽部

防災学習17年目を受けて、本年度も継続と啓発をテーマに学習を行った。生徒たちは津田の地域を知り、先輩方の残した成果をもとに、自分たちもできるという信念のもと、学習に取り組んでいる。

昨年度からのコロナウイルス感染症により従来の活動からの方向転換しながら形を変えて地域への啓発を発信し続けている。

防災学習を通して、自助・共助の学習を重ね、防災リーダーとして共助の立場から様々な取り組みを行っている。防災・減災の取り組みが行える活動を継続していきたい。「近所の方々とネットワーク作りの大切さと、中学生や高校生の温かい声かけの大切さ、大学生の専門知識のフィードバック」を実行にうつし、故郷を愛し、どんな災害が訪れようとも明るい未来が描けられる活動と啓発をしていきたい。

今年度からは、伝統の津田の防災学習を保障するために、中学校を飛び出し、津田新浜地区自主防災会の青少年部として活動を始める。

兵庫県

兵庫県立山崎高等学校

平成24年に始めた生徒主体の防災活動。「真下に山崎断層」「深刻な高齢化」に加え、「コロナ禍」という状況。今回は「みんなの避難を考える」をテーマに、様々な立場の人が安心して避難できる方法を考えた。

高齢者家庭を訪問し、聞き取り調査をするともに避難所までの経路と危険箇所をチェック。個別の避難マップにまとめた。校内では防災体験プログラムを生徒組織で企画、実行。コロナ禍での安全な非常食体験を考えた。さらに、避難時に必要と思うもの買い集め、一次避難袋、二次避難袋を作った。高齢者、子ども、高校生の各々について一覧表にまとめて配布し、準備を呼びかけた。その結果、全校生の過半数が避難袋を作り、防災について家族と話す機会を持った。生徒の働きかけで、全校生や地域の防災意識は高まり、行動を変えることができた。

また、行政に対しても災害時の迅速で正確な情報提供などを提言し、地域の防災力向上に貢献できた。

奨励賞

高知県

高知県立大方高等学校

本校は、南海トラフ地震による甚大な被害が想定されている高知県黒潮町にある唯一の高等学校である。高台に位置しており、地域住民の避難所に指定されていることから、災害時の避難はもちろんその後の避難所生活にも目を向け、地域に根ざした防災活動に取り組んでいる。近隣には保育園、小学校、中学校、黒潮町役場があり、地域と連携した防災活動が可能である。地域の防災の一端を担う存在として高校生を位置づけ、その防災意識と知識の向上とそれらを活かして行動に移す力、地域に貢献したいという思いの育成を目指し、防災教育を行っている。地域住民への避難路や備蓄品の提案、小中学校への防災出前授業、役場や企業と連携して空地を避難場所にする取組など様々な活動によって、地域の防災力向上に貢献することができたことが成果として挙げられる。また、その経験が生徒の防災意識の向上と地域に貢献しているという実感を得ることもつながっている。

大阪府

関西大学社会安全学部 近藤誠司研究室

わたしたちは、文字通り「毎日」、防災情報を発信している。取り組みの独自性は、ローカルメディアを駆使して、地域の実情に即した伝え方を考案し続けていること。たとえば、福井市の限界集落では、手作りの「かわら版」を毎月配布し、高齢者と土砂災害の警戒にあたっている。兵庫県尼崎市では、コミュニティFMラジオで、防災と福祉、ダイバーシティの問題に向き合っている。また、福島県西郷村では、村の公式YouTubeチャンネルで防災動画を配信するプロジェクトを始動させた。さらに、京都府京丹波町では、ケーブルテレビを活用して、“火の用心”を住民参加型のCMで啓発するキャンペーンを5年以上も継続して行っている。放送は、毎日6回。CMに出演した住民はのべ2,000人を越え、この秋、記念番組を制作する。コロナ禍にあって、活動は深化し、情報発信量は倍増した。そしてもちろん今も成長を続けている。

千葉県

千葉県立市原特別支援学校

千葉県立市原特別支援学校では、今年度、帰宅困難・引き渡し時の体制強化を目指し実践してきた。職員研修会では、帰宅困難時を想定し、子どもたちがより安心して過ごすために「市原BTL」防災タイムラインを作成した。合わせて学校とPTAで、子どもたちが学校に持参する「防災リュック」について共に考え、各家庭に備えを呼びかけた。防災教育の実践では、コロナ感染症対策を意識し、浸水体験や食具づくり、パーティションづくりなど体験的な活動を盛り込み実践した。高等部の生徒会活動では、防災委員会が中心となって月に一度の「予防防災デー」を設け、生徒が教室を回って危険な箇所がないか確認を行った。また、本校オリジナルの防災キャラクターも生徒たちと考えた。近年、市原市は、風水害で甚大な被害を受けた。その時の記憶を風化させないよう、これからも地域や家庭とつながり、いつ襲ってくるかわからない災害に備えていきたい。

和歌山県

和歌山県立みくまの支援学校

「あの高い場所まで逃げるよ」高等部のお兄さんお姉さんが率先避難者となり、避難場所まで下級生を誘導した。本校でスクールバス（以下、SBと表記）の降車訓練を始めて4年目となる。きっかけとなったのは、校内のSB委員会におけるSB助員の発言であった。「登下校中に被災したときの指針を示してほしい。」それまで、校内での地震津波避難訓練は実施されていたが、SBが被災したときの動きについては想定されていなかった。「肢体不自由児を含めて全員を安全に避難させるには」をテーマに今年度の訓練に至っている。SBに避難支援者を確保できるようにステッカーを提示すること、訓練の様子を地元新聞社に取材してもらい紙面で地域住民に周知することなど新たな取り組みとして始まった。訓練には、本校の職員だけでなく、バス会社や、自治体、警察など関係諸機関との連携も必要となってくる。地域全体で防災への備えを高められるよう尽力していきたい。

防災教育の力と知恵の広がりを応援するとともに、新型コロナウイルス感染症を乗り越えていく取り組みを紹介するため、「ぼうさい甲子園」の特設サイトを開設しています。受賞校・団体の紹介動画や取り組み状況など、本紙では伝えきれない内容を掲載しています。是非ご覧ください。

<http://bousai-koushien.net/>



令和3年度 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」

表彰式 概要

趣 旨

阪神・淡路大震災の経験を通して学んだ自然の驚異や生命の尊さ、ともに生きることの大切さを考える『ぼうさい教育』を推進し、未来に向け安全で安心な社会をつくる一助とします。児童・生徒・学生が学校や地域において主体的に取り組む、『ぼうさい教育』に関する先進的な活動を顕彰します。

なお、今回も昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症対策に苦慮されている全国の学校・団体の状況を考慮した「特別企画」として実施しています。

プログラム

今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に鑑み、急遽、オンラインで実施することとしました。関係各位のご協力に感謝いたします。

令和4年1月9日(日) 兵庫県公館

13:00 開 会

13:05 開会のことば
主催者あいさつ

- 河田 恵昭 (公財) ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長
- 齋藤 元彦 兵庫県知事
- 鯨岡 秀紀 毎日新聞大阪本社編集局長

13:20 表彰式

- 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」表彰
(グランプリ・ぼうさい大賞、優秀賞、奨励賞、UR レジリエンス賞、はばタン賞、だいじょうぶ賞、フロンティア賞、継続こそ力賞、しなやか with コロナ賞)

13:55 講評・講演

- 河田 恵昭 (公財) ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長

14:15 閉 会

表彰式の様子



学ぶ命を救うため



知事 17回目の今
ウィルスの下の
10校・団体
り、厳しい環
や創意工夫を
きました。



河田恵昭・選考委員長
(人と防災未来センター長)

知恵や創意工夫を発揮

なっています。毎年の成果をウェブページと動画配信サイト「エネパイ」で翌年度に共有するを目的として翌年度に共有する「備蓄」に防災教育を進めたい。初年度はグラフレッド

徳島県徳島市立津乃峰小は、2014年度から活動し、2017年度は「コナラ橋」という大衆を育てて模範しながら、高知市宮城町仙仙沼市立折戸中は、学校災害と地域防災の「連携

所の説明訓練を行う」の活動

と連携して防災活動に取り組んでいきます。初防算では防災の大綱を策定します。埼玉県立日高特別支援学校は、防災GACネット型組織で整備されたタブレット型端末を活用したタブレット学習や防災マシンの動向の調査や防災マシンの導入を促進し、2年度に防災マシンの導入となります。

コロナ禍で発生する様々な危険は常に発生しています。防災教育の重要性はますます増えています。時代に応じた取組が必要であり、ほうさい甲南も変化しながら継続していきなさいと考えています。



防災植物を加熱調理する和歌山商業高の生徒たち（同高提供）

グランプリ

和歌山県立
和歌山商業高

南海トラフ対策 情報発信

同校の卒業生は地元志向が強いという。相
当の川口数志教諭(37)は「商業高校は『人々
をつなぐ』場。地域の防災・被災支援『社会
人』になってほしい」と期待を寄せ、今回の受審
生を「このことを成し遂げたという実感を持
てたと思う」と喜んだ。

を重ねた。阪口彌子さん¹⁸は、聖賢讀書の人
を賞めて、ライオンを飼って、ライオンと
は性質に大きく異なっている。ライオンの光量と
ポードの軽量化などまだまだ改善にはある」と
話す。

一垣野田家²は日本防炎植物協会の協力
を得て、非常食となる「防災植物」の見つけ
方や調理法をまとめた。新家君若さん¹⁸、
新家綾乃さん¹⁸は「調理法の主でおいし

「CREATOR」班は、聴覚障害者と盲
思疎通するメッセージボード「かけるべん」
を開発。県立和歌山工業高等学校生徒の意見を
踏まえ、和歌山工業高の協力の下、暗所で使
えるようなライトを搭載したり、指でこで意図
めた。

形式は22年1月9日、兵庫県公館（神戸市）と
ルスの感染拡大の影響で活動に制約がある中、
に取り組む姿勢と美観的な成果が高く評価され
てゐる。

【宣治郎、近藤隆、福田隆】

みたが、スマッチやライダ、を使わずに次

に計100人、団体から応募があった。新型ロケットの感度拡大の影響で活動に制約がある中、地道に取り組み姿勢と実践的な成果が高く評価された。

表彰式は同年1月9日、兵庫県公館（神戸市）と各愛護者をオンラインで結んで開かれた。各愛護校・団体の取り組みは、ほうさい甲子園特設サイトでも公開している。

「宮泊舞、近藤隆、福田隆



「命をなく避難路」を確かめる阿南立構小3年の児童たち（同小提供）

避難所運営 孤立も想定

徳島県阿南市立橋小

優秀賞

徳島県阿南市立豊小中学校
は、過去に地震、津波の被害に遭い、高台に移転した歴史がある。安全な場所にあるからこそ、災害時には避難場所として避難。1年から6年まで、年間計画に基づいて避難場所について体系的に学んでいる。

避難場所が孤立した場合を想定し、児童たちは地元の自主防災会の力を借りながら、外部に助けを求めるための「命のつなぐ避難路（豊小の道）」を確立した。実際に歩いてみる上で、豊かな想像を得たという。

新型コロナウイルスの感染拡大で学校単位の活動が難しくなることを利用し、児童の発達段階に応じた学習を丁寧に展開できたことが、オンラインを活用して東日本大震災の被災者とつながることができた。



防疫について議論する座
前高田立高田塾 中の
生徒たち（同校提供）

教訓・復興 紙芝居で
岩手県陸前高田市立高田第一中

優秀賞

岩手県陸前高田市では、日本大震災で1759人が犠牲となり、高田第一中は当市内最大の避難所となった。防災教育を通して生徒たちに「伝えたい」という思いが、震災の歴史を語り継ぐきっかけとなった。



状況別の進捗行動などについて話し合う自衛隊美空音楽隊
高校の生徒たち(右)と園児提供

「避難行動アイデア集」
目黒星美学園中学高校



豊別統合高専で高校生による
防災教材づくりを支援する
静岡大藤井研究室のメンバ
ーら（©研究推進班）

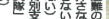
知的障害者向け動画
静岡大教育学部藤井基寛研究室

優秀賞

静岡大教育学部藤井 貴典先生は、**「考えるの時間」**をテーマに教材の開発、授業実践、および甲子園を過去と回顧する連動前に続く新型コロナウイルス禍中の活動を描いた2021年は「伝える力」も一つの柱に加え、知見を伝える高校生の成長や障害者向けの動画教材の制作に取り組みました。

高校生の研究は静岡市内の5校と連携。おなじ知識を研究のメンバーから学んだ高校生が災害時の避難行動を並べだして見つけた「考える時間」の6つの保存罐・幼稚園で伝えられた動画に込めた障害があってもできるように物陰しにしたい、随所にクイズを盛り込んだ。

視覚に特別支援学校から学びわたりやすさという想いが伝わった。



全校児童、生徒に避難の仕方「おかしい1」(押さない、駆け回らない、しゃべらない、見えない、散ばらない)を伝える干渉集「金谷特別支援学校「あひま」防災隊」のメンバー。(同校提供)

ダンスに感染対策追加
千葉県立東金特別支援学校

優秀賞

千葉県立東金特別支援学校
対症、新型コロナウイルス
対策を踏まえた防災教育
活動の工夫が高く評価され
た。2021年秋の台風襲来時
には子どもたちの声かけで雨水対策をしたとい
い、成長を実感している。

同校では「防災を学ぶ前に」を合言葉に、
児童・生徒「あたまより防災」を核とし、
災害への備えを学び、啓発している。

コロナ禍で対面交流が制限される中で、も
地域へ情報を発信し続けるため、PRの活動や
防災の知識をまとめた防災紙の発行（毎月1
回）を開始。日々受け継がれている避難行動を
示すオリエンテーション「あたまより防災」も、
感染症対策を盛り込んだ新バージョンに進化
させ、動画をホームページで公開した。

応募校・団体のご紹介

たくさんのご応募、ありがとうございます！
来年度の再チャレンジ、お待ちしております。

北海道	Kompas	兵庫県	神戸市立布引中学校74回生
岩手県	盛岡市立下橋中学校	兵庫県	西宮市立学文中学校
宮城県	きずなFプロジェクト	兵庫県	兵庫県立飾磨工業高等学校 チーム「県下布防」
宮城県	宮城県仙台西高等学校 地学部	兵庫県	兵庫県立柏原高等学校 インターアクト部
東京都	荒川区立峡田小学校	兵庫県	兵庫県立東灘高等学校・防災ジュニアリーダー・写真部・ボランティア同好会
東京都	ちーむべりいぐっと！	兵庫県	NPO法人アトリエ・Petata
東京都	品川女子学院5C meme	広島県	呉市立広小学校
神奈川県	神奈川県立座間高等学校 防災委員会	広島県	福山市立鞆の浦学園
千葉県	麗澤中学・高等学校	広島県	広島市立船越中学校
埼玉県	ときがわ町立都幾川中学校	広島県	広島県立広高等学校 呉市おたすけ防災部!!
埼玉県	埼玉県立栗橋北彩高等学校 ボランティア部	広島県	広島県立広高等学校 輝空系チーム
群馬県	群馬県高崎市立寺尾中学校	山口県	山口県立田布施農工高等学校
長野県	長野県蘇南高等学校	山口県	山口県立光丘高等学校
愛知県	岡崎市立六名小学校	香川県	まんのう町立満濃中学校
愛知県	愛知県立西春高等学校	高知県	高知県高岡郡四万十町立昭和小学校
愛知県	愛知県立碧南高等学校・高校生防災セミナー	高知県	高知県幡多郡大月町立大月中学校
愛知県	名古屋市大学生消防団 名古屋市立大学分団	高知県	太平洋学園高等学校
愛知県	石浜中自主防災会	高知県	室戸高校 1年2H
三重県	八風中学校 2年生	福岡県	新宮町立新宮東中学校
大阪府	大阪市立水都国際中学校防災部	福岡県	福岡県立三井高等学校・家庭クラブ
大阪府	関西学院千里国際高等部 Disaster Management Team	熊本県	山鹿市立鹿北中学校
兵庫県	西宮市立苦楽園小学校	大分県	日田市立津江中学校
兵庫県	神戸市立愛垂児童館	大分県	日田市立五馬中学校

令和3年度事業概要

1	応募開始 令和3年6月18日	選考委員	委員長 河田 恵昭 副委員長 鯨岡 秀紀	(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構 人と防災未来センター長 (株)毎日新聞社大阪本社編集局長
2	応募締切 令和3年9月30日		副委員長 藤原 俊平	兵庫県防災監
3	選考委員会 令和3年11月16日		委員 石井布紀子	特定非営利活動法人さくらネット 代表理事
4	記者発表 令和3年12月9日		委員 石塚 哲朗	文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課 課長
5	表彰式 令和4年1月9日		委員 納谷 淑恵	特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構副理事長
			委員 平田 直	防災科学技術研究所 参与兼首都圏レジリエンス研究推進センター長 (東京大学地震研究所 教授、一般社団法人 防災教育普及協会 会長)
			委員 梶田 順子	兵庫県立舞子高等学校環境防災科 科長
			委員 村上 威夫	内閣府政策統括官(防災担当)付 参事官(普及啓発・連携担当)
			委員 渡邊 征爾	独立行政法人都市再生機構西日本支社災害対応支援室長